

## 情報知識学会関西西部会2008年度第3回(通算第9回) 研究会報告

日時: 2009年03月14日(土) 14:30~17:10

会場: 大阪樟蔭女子大学新館3F第4会議室

論題: 欧州における図書館・文書館・博物館連携の最新動向: 欧州デジタルプロジェクトを中心に

発表者: 菅野育子氏(愛知淑徳大学)

共催: アート・ドキュメンテーション学会関西地区部会、日本図書館研究会情報組織化研究グループ

後援: 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会

参加: 40名

内容:

MLA(博物館・図書館・文書館)連携という問題意識のもと、発表者が行った欧州デジタルプロジェクト調査(2009年2月26日~3月4日)について、これの実施から間もない段階での、鮮度の高い発表が行われた。

### 1. MLA連携の意義

- MLAはそれぞれ独自の伝統をもって資料を扱ってきたが、近年相互連携の重要性がクローズアップされてきた。特に、ワンクリックであらゆる資料を検索でき、その所在を知ることができる検索システムを協働して作成するための連携が重要視されている。今回調査した欧州においては、Googleの脅威とそれへの対抗という意識が連携の背景にあると思われる。
- 情報共有だけでなくサービス拡大のため、MLAそれぞれの特徴と強みを活かした連携が重要である。以下、それぞれの特徴と強みについて述べる。博物館は、唯一性をもった収蔵品に研究的態度で接し、来歴情報などを蓄積している。図書館は、基本的にコピーの存在する資料を扱うために、同定を可能にする標準化に熱心で、資料に関する情報(メタデータ)の提供には一日の長がある。文書館は、しばしば強調される保存機能だけでなく、歴史的意義を含めた資料の解釈にも強みがある。
- デジタルプロジェクトという観点から見れば、デジタルコンテンツ作成、メタデータ作成、検索システム構築のそれぞれの側面において、MLA連携が考えられる。
- 今回のデジタルプロジェクト調査では、個別の技術的側面よりも、組織作りの側面を中心に現地調査を行った。

### 2. 訪問先1: Europeanaプロジェクトオフィス

- Europeanaは、欧州の文化遺産情報を統合的に提供す

るポータルシステムで、2008年に一般公開された。これは非常に注目され、公開時には、アクセスが集中し、一時閉鎖・システム増強を余儀なくされるほどであった。今回は、デンハーグ(オランダ)にあるプロジェクトオフィスを訪問した。

- 2005年にEC(欧州委員会)議長から出された「欧州の文化的・科学的資源をすべての人にアクセス可能に」という手紙が契機となり、同年9月に「i2010:Digital Libraries」プロジェクトが立ち上げられた。Libraryとあるが、第一には文化遺産、第二には科学情報を、広範に扱うものである。MLAにわたる文化遺産全般を扱うポータルとしてEuropeanaが構想され、2007年から試行版の運用がはじまり、その後本版化された。なお、文化遺産のデジタル化の重要性はLund原則(2001)で既に確認されており、このためのプロジェクトとして、英・仏・伊を中心にMINERVAプロジェクト、その後継のMICHAELプロジェクトが進められてきた。MICHAELプロジェクトはEuropeanaに参画し、データ提供を行っている。
- 試行版には、EDL(European Digital Library) Foundationから資金が提供されていた。現在はECとEU各国からの資金に拠っている。運営形態はPrivate Agencyで、20名という少人数の運営組織である。総括責任者の下に、マーケティング・広報・プロジェクト管理を担当するビジネス開発部門、相互運用性確保やサイト運用を行う技術部門、予算配分や会計を行う財務部門が置かれている。様々な専門家が集められ、担当者は総じて若い。今後は民間からの資金も一定程度見込み、ビジネスモデルの構築を重要視していると感じられた。
- Europeanaは基本的にアグリゲーションサービスを行うものであり、各国諸機関のコンテンツ構築に依存するものである。すなわち、各機関からメタデータの提供を受けて統合検索システムを構築し、各機関へのリンクによって一次情報閲覧を可能にしている。メタデータ収集のために、ダブリンコアをベースに一定の独自拡張を行ったEuropeana Semantic Elementsというスキーマを開発している。メタデータ収集の際には、プログラムチェックによる一定の質的コントロール(品質の低いデータはいったん返却するなど)が行われている。
- 現在は著作権処理を含めてコンテンツ構築はすべて参加各機関に依存しているが、今後はアクセスに必要な追加情報や著作権情報など、Europeana側で持つ情報の増強を構想している。

### 3. 訪問先2：フランス文化省

- ・国レベルの MLA 連携の姿も調査する必要がある。そのため、フランス文化省の科学技術部門代表を訪問し、文化政策、デジタルプロジェクトについて調査した。フランスの文化政策の柱の一つは「文化の普及と民主化」であり、文化へのアクセスの機会均等をめざす手段として、デジタルプロジェクトが位置づけられている。ここでは Europeana のほか、MICHAEL (フランスが代表国)、Culture.fr (文化省) などのプロジェクトも推進されている。
- ・フランス国立図書館 (BnF) でも Gallica2 などの電子図書館事業を積極的に行っている (なお、今回の調査では BnF も訪問した)。

### 4. MLA 連携の契機としてのデジタルプロジェクト

- ・統合検索をめざすデジタルプロジェクトは、MLA 連携をいっそう推進する大きな契機となっている。今回の調査では、政策・組織・運営の側面を主に調査した。今後は、デジタル化の技術基準開発による MLA 連携への影響や、著作権処理などの側面も調査を行いたい。

#### \* 質疑応答

アグリゲーションの可能性と限界、欧州と米国の違い、日本の MLA 連携、メタデータの相互運用性、ビジネスモデルの可能性、など諸方面にわたって活発な質疑応答があった。

#### \* 懇親会

研究会終了後、いつものように、会場近所の居酒屋で楽しいひと時を過ごした。三団体共催ということで多方面の方が集まり、話が弾み、その結果、予定の時間を一時間近く超過してしまった。

#### \* 参考サイト

Europeana

<http://www.europeana.eu/portal/>